

修士論文要旨

大分県における近世灯籠研究

別府大学大学院 文学研究科 文化財学専攻

M1513004 種生 優美

石造物というものは石仏や五輪塔、宝篋印塔、板碑など様々な種類がある。その中でも石灯籠は各地でみることができる。石灯籠は、538年に百済から仏教とともに日本に伝えられたことが起源であり、御加護をより一層強く願うために神前に灯りをともすことを目的として祈願者から奉納されたものである。

石灯籠研究というものは天沼俊一を初めとして様々な分野の研究者によって行われてきているが、調査対象である石灯籠のデータが圧倒的に少ないのが現状で、近世の石灯籠は、調査対象数が非常に多く、調査を行うには時間がかかるとされ、地方自治体などではあまり近世の石灯籠は調査研究されてきていない。そこで石灯籠の型式がどう変化したのか、地域的特色はみられるか。またなぜ竿部の形式が撥形へと変化したのか、2基1対の形になったのはなぜか。この4点を中心に見ていきたい。

本研究における分析範囲は大分県の宇佐・国東半島地域である。分析対象として調査を行ったのは宇佐神宮と六郷満山地域の寺院、日出・杵築の神社の石灯籠である。今回の研究で型式分類を行うにあたり、従来用いられてきた火袋の角数での分類ではなく、竿部に着目して、円柱、円柱（節あり）、角柱、六角柱、八角柱、撥形、異形（狛犬、童子）の7つに分類を行った。

国東半島北部では1730年までは円柱や六角柱を中心に、その後30年をあけて1761年から撥形が石灯籠の型式として用いられていく。国東半島南部では1718年ごろまでは円柱、円柱（節あり）、六角柱が主流であったが、1737年以降に撥形が現れる。また宇佐神宮では1708年までは六角柱が、1710年以降は撥形が型式のほとんどを占めている。

このように宇佐・国東半島地域を見ていくと江戸時代初期から中期にかけては六角柱の型式が用いられている。その後1710年以降に撥形が造られはじめ、現代まで奉納される型式となっている。撥形の出現は時代の流行や他地域にある青銅製灯籠や石灯籠の影響を受けて造られた型式であると推測できる。

宇佐・国東半島地域の石灯籠は全国的な変遷と同様に石灯籠が造られ、寄進されてきたが、国東半島地域には春日型灯籠が確認できないこと、江戸時代の早い時期に石灯籠が造られ始めたこと、六角柱の石灯籠が多いことなどはこの地域独自の特色ではないかと推測できる。しかしこのことを示すには宇佐・国東半島地域だけでなく、大分県をはじめとして九州地方から広げ、全国的な調査分析が必要である。